

「新会長に聞く CIEC—過去、現在、そして未来」



若林靖永さん

(CIEC 会長／京都大学 経営管理大学院経営研究センター長) に聞く

2018年8月、CIEC 会員総会において若林靖永先生（京都大学）が新しい会長に選出されました。2016年には本学会も創設20周年を迎え、今、また新しい学会の歴史がはじまろうとしています。世の中のテクノロジーを取り巻く技術革新も急速に変化を遂げており、また教育界も新しい学習指導要領が告示され、教育のパラダイムも大きく転換しようとしています。コンピュータ利用教育学会は、もともとどのような理念を持って創設されたのか、この20有余年の間どのような役割を果たしてきたのか、そして、これからどのような貢献をすべく変貌しようとしているか、若林先生に大いに語っていただきました。

インタビュー：CIEC 会誌編集長 横川博一（神戸大学）

横川編集長 今日は、コンピュータ利用教育学会（CIEC）の新しい会長に就任された若林先生にお話をうかがおうと京都大学にお邪魔いたしました。私は個人的には、これまで先生と直接お話をさせていただく機会がありませんでしたので、そういう意味でもわくわくしております。どうぞよろしくお願いいたします。

若林会長 こちらこそどうぞよろしくお願いいたします。

経済学の専門家としても若林先生

横川 先生のご専門は「経営学」だと理解しておりますが、どのような研究をされているのでしょうか。

若林 より狭く言いますと「マーケティング」です。専門はマーケティング、流通、商業といった分野です。また、最近は、「起業家研究」と「批判的思考教育」も自分の専門というふうに考えています。マーケティングの発展形で起業を捉えています。こういったことを自分の研究ないしは教育の主領域というふうに自分では定義しています。

横川 先生のウェブサイトを少し拝見させていただいたのですが、マーケティングのターゲットは顧客のニーズで、「顧客を大切にする」といったフレーズが目につま

りました。

若林 もともとの出発点はそこで、ビジネスの本質は顧客にとって価値あるものを産み出して提供することであると考えています。そこにフォーカスをした研究教育に取り組むことで、マーケティングを自分の専門の仕事にしようというふうに決めたという経緯があります。

CIEC とのかかわり

横川 とても興味深いですね。そうしますと、先生の教育研究のご専門と「コンピュータ利用教育学会」とのかかわりはどのあたりにあるのでしょうか。

若林 ぶっちゃけていうと、専門とのかかわりはないんじゃないですかね（笑）。

横川 （笑）そうしますと、なにか歴史的な経緯があるのでしょうか。

若林 CIEC が生まれるときというのは、大学生協がアップル社のマッキントッシュを取り扱うというところから始まりました。ちょうど1990年前後の話ですけども、そのときに、大学生協が大学で単にパソコンを売るということだけでいいのか、ということについて、当時の大学生協の関係者、そして大学生協に関心のある教職

員みなさんが、そういう問題意識をもって議論しました。やっぱり大学に新しいパーソナルコンピュータというテクノロジーが導入されることを、大学における教育のイノベーションにどうつなげるかということに取り組む必要がある、高等教育を発展させるということに、大学生協はパソコンを取り扱うことを通じて貢献するんだという議論をすすめました。そのためには売るだけじゃだめだ、というので、実は1993年に「PCカンファレンス」が、当時は大学生協の連合会の主催で開催されました。そしてPCカンファレンスというイベントだけではなく、パーソナルコンピュータを高等教育の革新につなげていくためのある種のムーブメントを進めるような組織、ま、学会のようなものをつくろうということで1996年に設立されたのが、CIECです。当時の日本語名称は「コンピュータ利用教育協議会」、という名前だったわけです。私は、当時全国大学生協連合会教職員委員会でこのCIECづくりの中心として活躍されていた愛媛大学の湯浅先生などに声をかけられて、設立時から参加しているという経緯があります。ですから、自分の専門からつながったというよりも、高等教育を変えよう、高等教育を大学生協の事業や活動を通じてどう貢献するか、ということでした。

横川 高等教育にかかわることになられたことが、コンピュータと教育のかかわりの問題に先生に目を向けさせることになったということですね。その後、CIECはこうした課題にどう取り組んでいくことになったのでしょうか。

若林 1996年がCIECがスタートした年。それ以前はパーソナルコンピュータでした。つぎに、ご存知のように、1993~94年にはインターネット、TCP/IPのネットワークが商用化され、つまり研究だけでなく一般開放されて、かつwwwという（当時はMosaic（モザイク）という形で普及しましたが）、そういう通信サービスが広がっていきました。ですから、大学でインターネット環境をどうつくるかということと、そのネットワークをどう大学の教育イノベーションにつなげていくかという議論が1990年代半ば以降に大きなテーマになっていきました。

今申し上げたように、最初はパーソナルコンピュータ、その後はインターネットの普及や活用、半分はいかに情報システムを大学でつくるか、というインフラづくりの議論がまずベースにないといけないので、そういう研究発表も当時のPCカンファレンスやCIECの間ではあ

りました。また大学の授業も変えていこうという動きが次の波としてあって、私も当時いろいろ実践したことを発表したこともありました。私も2本だけ実はCIEC会誌『コンピュータ & エデュケーション』に投稿した論文が載ってるんですね。これは経営学教育にどうコンピュータを使うかということで、昔大学院生たちと書いたペーパーを投稿したんです（「経営系修士論文作成とホームページ活用」, Vol.4, 1998年および「インターネットを利用した書籍ライブラリーの構築—経営系大学院教育の一環として—」, Vol.7, 1999年）。もう大昔の話ですけどね。

横川 それは知りませんでした。ちょっとバックナンバーを紐解いてみます（笑）。

若林 調べないで。恥ずかしいですから（笑）。

CIECの原点はどこにあるか

横川 そのころからもう20年がたちますね。2016年にはPCカンファレンスで「CIEC20周年記念シンポジウム」も開催されました。この20年くらいの間、先生はずっとCIECを見てこられたわけですが、たぶんいくつかのフェーズがあったのではないかと思います。そのあたりはどう見ておられるでしょうか。

若林 フェーズとみるというよりも、今申し上げた原点、つまりパーソナルコンピュータやインターネットというテクノロジーをいかに教育に活用するかというのがCIECのスタートです。もっと明確に言えば、教育っていうとどうしても偉い人が上から教えるみたいなイメージが強いですね。それを学習者中心に考えるのであれば、学び・学習といった方がいいかもしれませんが、教育・学習を変えていくためにパーソナルコンピュータあるいはインターネットというテクノロジーをどう活用するか、そういう教育を変えようという情熱、意欲、志をもっている人たちの集まりとしてスタートしました。今は本当に様々な分野、特定のテーマがあって、たとえば外国語教育とか小学校でのプログラミング教育とかいろいろなテーマごとに、たくさんの学会があります。しかし、CIECは何でもありなんですね。CIECというのは学術会議団体、学会でもあるんですけども、単なる学会というよりもそういうムーブメントを指向している組織だというこの原点は今でも引き継がれているし、これから一番だいじなCIECのDNAじゃないかなと思っています。

横川 一般論で言いますと、所期の目的も10年、20年と時間が経つうちに、原点は次第に薄れていたり、忘れ去られていくこともありますね。もし、教育学なら教育学の分野で発表すればいいじゃないか、外国語だったら外国語で発表すればいいじゃないか、というような声が聞こえだしたとしたら、この学会がもっている意義をもう一度問い直してみる必要があるのかなと思ったのですが、CIECの原点は今でも変わっていないということですね。

若林 それはある意味CIECの一番のミッションであり、CIECのユニークな点だと思うんですね。

CIECのミッションは？

横川 原点は変わらない。ですが、時代は変わっていくので、変化をきちんととらえて原点を考えるとこのセンスは求められますね。

若林 そういう意味においては、パーソナルコンピュータが出た、新しい、何かできるんじゃないの？というワクワク感とか、インターネットが出てきた、面白い、ワクワク、っていうね、新しいテクノロジーが出てきたのでおもちゃのようにそれを使ってなんかやろうみたいな時代ではもうなくなって、もうそれは当たり前のツールになっている。その上に今高度なデジタル社会、第4次産業革命、Society5.0が展開されようとしているんですね。つまり、ビッグデータ、IoT、AI、ロボット、ですね。デジタルテクノロジーがさまざまな領域に広がって、教育分野でいえばEdTech（エドテック）などと呼ばれていますけれども、教育・学びの新しい仕組みやサービスが生まれてきています。

下手をすると、いや無くならないと予測していますけれど、大学のある部分の機能はもう大学でなくてもいいよねということで、大学そのものの存在のあり方、あるいは小中学校といった今の学校教育のあり方そのものも、これからの100年単位で考えると揺さぶられるような第一歩がすでに始まりつつあります。一挙にはすすみませんし、学校教育も大学教育も新しい流れの中でどう対応していくか、自らを変えて挑戦していくということになるとは思うんですけど、CIEC自身も、おっしゃることもそういう意味でミッションやビジョンというのをあらためて問い直す、まとめる、というのはそろそろ呼びかけてもいいのかなと思っています。そうすることが、原点を引き継ぎながら未来に対して新しい可能性を示すことになるのではないかな。ミッション・ビジョンを再定義

するというのも、今、求められるんじゃないかと思っています。

急速に進むテクノロジー革新と教育改革

横川 このところ本会誌のインタビューや特集でも取り上げているんですが、いま第4次産業革命がかなり急速に進んでいると言われていたんですが、そのあたりはいかがでしょうか。

若林 急速に進んでいますね。今までなら既存の制度とか既存のサービスの、ある部分のツールだけを別のテクノロジーに変えるだけで、基本は変わらなかった。マーケティングにインターネットが入ってきたときも、最初は、単に、今まではテレビで宣伝したものをホームページに変えました、というものだと思っていました。ところがちょっと古い話ですけど、Web 2.0という議論（2005年9月にティム・オライリー氏が発表した論文「What Is Web 2.0」から注目された、ユーザー主導型の新しいインターネットの展開）が出たときに、いや違うんじゃないかと思ったんですね。ウェブというのは、コミュニティでみんなが参加できる、みんなが発信できる、というプラットフォームなんだと気がついたんですよ。ブログやツイッターなど、ユーザー参加型の世界に注目が集まりました。ところが、それもね、そういう「インターネット民主主義」もある種幻想で、結局われわれの行動データはすべてグーグルやフェイスブックなどのプラットフォームフォーマーが押さえてしまう。彼らがそれをビジネスに活用するというふうな形で、プラットフォームを通じて様々なパーソナルなデータが収集される。それを持っているところが競争力の源泉であるかのように、競争のルールが大きく変わろうとしています。

つまり、何が問題かという、既存の社会とか制度とか既存の社会の価値観みたいなものはそのまま部分的にテクノロジーが変わる、というのではなくて、テクノロジーを受け入れるプロセスで様々な新しいプレイヤーが出てきて、産業構造も変わる、働き方も変わる、学ぶべき知識も変わる、といった具合に、ガラガラガラっとこれから加速度的に社会の構造そのものが、価値観そのものが揺さぶられようとしている。だから、今、羅針盤なき状況に陥ろうとしているんですよ。ほんとに『ワンピース』じゃないですけど、海賊の時代なんです。羅針盤がないときには自ら意志をもって大海原に乗り出す勇気が求められる、まさに海賊ですよ。そういう時代になりつつある。かつて戦後の高度経済成長期に、こつこ

つ学校で勉強して東大に入り、それで銀行に就職したら大成功といったようなそのモデルがもう通用しない。私事ですが、今、上の子が小学校4年生にやっとなったんですけど、その子どもが大きくなる頃にはどうなっているんだろうと思うことがあります。子育てしながら、自分の今までの学びの経験が、これまでの自分はこう育ってきたという経験がほとんど通用しないと。それを疑ってかからないと、子育てができないと考えています。もちろん、だいじな部分で引き継げる部分はあると思っていますが、大転換時代に今の CIEC がしっかりと立ち向かっているかという、極めて不十分じゃないか、という危機感は持っています。そのためにはミッションとビジョンを考えるとすることを通じて、こういう状況に対して CIEC はどう立ち向かっていった CIEC の存在意義を見出し、CIEC があってよかったねと社会的な貢献をデザインできるか、あるいは CIEC に集まるみなさんが CIEC があって楽しいよねと思っていただけるか、というのを、設計し直さないといけないんじゃないかというふうに思っています。

横川 うかがっているだけでワクワクしますね。その辺りの大きなビジョンといいますか、どこに向かって行けばいいのかというのは、先生の見方ですと、羅針盤がない、大海原に出ていく勇気もない、しかし、AI が最近ちょっと面白いので、そういうところには飛びつくんだけど全体を考えるとやはりまだ至っていない、ということになるのでしょうか。

若林 でも、すでに多くの人が新しいビジョンと挑戦をはじめています。たとえば、文部科学省中央教育審議会答申や新しい学習指導要領でも、「なんちゃってアクティブラーニング」を避けるために「主体的・対話的で深い学び」と言っているんですよ。これを実行する現場に



としては難題で、本当に今、現場の学校の教員や学校の関係者は悩みながら挑戦をしているところですね。主体的・対話的・深い学び、これはある意味当たり前で、今までの学校教育、あるいは高等教育・大学教育でも重視されてきたし、まったくできていなかったわけじゃないのだけれど、そこにフォーカスしてきたか、そのためにふさわしい教材とか教育方法を編み出してきたか、というところではないんですね。そのことが、やはり、AI とかロボットとか登場してくるこの現代社会において、未来に活躍できる、未来に自分の人生の主人公として、他のみんなと協働して生き生きとした人生を歩めるためには、その基礎には言われたことを学ぶとか、先生の顔色をうかがってこれが正解だなとか、本の読み方も適当に読んで自分なりの勝手な解釈で満足しているとかですね、そんなような学び方ではだめなんですね。やはり主体的・対話的で深い学びを通じて乗り越えていかなければなりません。政府・自治体、学校、団体、企業等がそういう意味で大事なキーワードといいますか、コンセプトを出しているの、そういう議論を踏まえてしっかり取り組まないといけない。ひとつにはそういうことがあります。

もうひとつ。新井紀子先生、「東ロボくん」を開発した理研の先生ですが、最近、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）という本を紹介したいと思います。新井先生は、さらに一般社団法人も作って、いわゆるリーディングスキル能力のテストも始めるようになりましたね。いわゆる、本を読んでいるように思っても、「なんちゃって」で理解しているだけで、ちゃんと「てにをは」、つまりこうこうだからこうで、というふうに、頭の中で集めた関係とか、前提・非前提の関係や原因と結果の関係だとか、そういった論理的な読み方を頭の中でイメージできない。自分が理解できる言葉だけつないでたぶんこういう意味だろうと勝手に読んじゃう。書かれている通りにちゃんと理解できない中学生や高校生が増えている。場合によっては、大人にテストしても間違えるということが言われていて、結構基礎的な、ほんとうにベースになるところでだめになっている。これができないということは、働くときにマニュアルを渡してもそのマニュアルどおりに働けない、もちろん自らマニュアルやルールを立案することもできないわけで、上司が指示して教えても、何度教えてもわからないし、上司になって教えることもできない。だって自分勝手な解釈しかしないわけですから。そして自分の理解が自分勝手な解釈であることに自覚がないのですから。そんなことで、結構実はベーシックなところで力

が落ちてきていて、単純に教科学習で教科の知識の理解ができないということで点数が取れないじゃなくて、そもそも教科書が読めない。それはもはや教科学習以前の問題ですね。子どもたちの学び、教育において、このような危機的な状況があるということもちゃんと踏まえた議論が必要であると思います。

CIEC がとりくむべきテーマ？

横川 今の時代の流れにかんがみますと、本学会の「コンピュータ利用教育学会」という名称についても、このままでいいとお考えでしょうか。CIEC がこれからとりくむべきテーマはなんでしょうか。

若林 デジタルテクノロジーを使うことでどんどん教育あるいは学びの革新が進んでいく中で注目すべきものはたくさんあります。たとえば、スタディサプリのようなアプローチで、つまり多くの子どもたちや受講生がそれぞれの到達度に合わせて学んでゆくコンテンツを提供し、その利用データをいっぱい集めて、そのデータによって教材・ビデオなどをすごいスピードで変えていく。学校教育では一斉授業が基本ですが、IT の力を活用すると A さんには A さんに向いた、あるいは A さんのレベルに応じた、あるいは A さんの特徴や特性に応じた学習プログラムができる、つまり、学習プログラムのパーソナライゼーション、カスタマイズ化というのが可能になるわけですね。そこに AI が入ってくれば、さまざまな AI がその人の学習能力や学習状況を診断して、その人に合った学習プログラムをカスタマイズして提供してくれて、そういう形での学びが急速に広がっていく可能性があります。

さらに MOOC（大規模オープン・オンライン・コース）のように世界中の人たちがオープンに学べるようなやり方、あるいは反転教育のように、事前に e ラーニングをやってその後でアクティブな協働型の学びをするというような議論もありますし、また、今まではオンラインでの協働型学習は難しいと言われていたのですけれど、たとえば、Zoom のような新しいインターネットサービスを使うと 30 人で議論することもできるし、30 人を 6 人ずつのグループに分けるなんていうことも、ぱっと部屋を分けてそれでやってまた集まるみたいな、そういうことができるようになったということで、やはりテクノロジーを通じてさまざまな今までできないと思っていたことができるようになってきた。

とくにここでの注目したいのは、もう一度言いますと、データを収集してそのデータを活用して学習・教育

を改善する、データを活用して個々人に合わせた学習・教育方法を提供できる、などというような革新が起ころうとしているということです。これが、まず第一に注目すべきことだと思っています。

一方で、人間の学びというのは、「生きるとは何か」という単純な正解があるような、教科教育では出てこないようなものだと思います。知とは何かとか、生きるとは何か、とか社会はどうあるべきかなどというようなことについて自問自答しながら自分らしく自分なりに生きていくという力を身につけるというのは、今までの自分の壁をどう破って変わっていくのかといったようなことが問われています。そういう議論をする場合には、横川さんのご指摘のとおり、「コンピュータ」を使うというところから離れて教育の本質を考える必要があるのだらうと思います。こういうのは熊本大学の教育哲学の苦野一徳先生とかもいろいろな形でアピールしていますが、やはり人間の在り様を問い続けることなんですね。で、そういうことをしようとする、とりあえずコンピュータは置いておいて、「学生たちよ、町に出よう」といった話じゃないですけど、大学の中で決められたカリキュラムで学ぶということではない学び、一言でいうと、私は「越境学習」というふうにネーミングするのが一番わかりやすいかなあと思っているんですが、今までの自分の殻を破るような体験を通じて自分の今までの価値観とか学びを問い直す、揺さぶるというですね、そういう学び。どうしても教科学習は、こういう実技やこういうことができるようになれば○ですよ、ということで、いかに効率的に学んでこれを達成するかとなります。科目で 100 点を取るだけで人間を教育するという点で十分なのかというと、やはり不十分なんです。そういう意味で「越境学習」というような、そこにコンピュータを使う使わないという問題はあれけど、あまりコンピュータは本質的ではありません。教育の、そもそもの在り様ということについても、もう一つの柱になるのではないかと、CIEC の未来あるいはこれからの教育学習について取り組んでいくテーマとしては私はその両面を睨まないとダメなんだろうと考えています。片方だけでは不十分だと思います。

横川 とてもよくわかりました。私のさきほどの問いかけは、そんなだいそれた深い質問ではなかったのですが、若林先生が思い描いておられるようなこと「コンピュータ利用教育」という文言に収まりきるのかなと思ったものですから、学会の名称についてうかがった次第です。

若林 学会の名称自体もですね、そういう意味で言いますと、妹尾堅一郎先生が会長だったときに名称を変えようとして、2009年の会員総会で否決されているんですね。それでやり直してどうなったかという、コンピュータ利用教育「協議会」から「学会」に変わったんです。ところで、学会の英語名称知ってます？横川さんはもちろんご存知でしょうが、学会の英語目を CIEC の会員総会をやる前にメンバーズコメントということでたたき台を示して事前の意向投票みたいなものを行ったんです。英語の名称は、当時の妹尾会長らの問題意識を活かして、すでに大胆な名前に変わっているんです。Community for Innovation of Education and learning through Computers and communication networks ということで、コンピュータとコミュニケーションネットワークを通じて、教育だけじゃなくて教育と学習のイノベーションを実現するコミュニティだと言っています。だから英語の方は結構踏み込んでいますよ。

横川 なるほど。それを日本語でどう表現するかという方向で考えると、難しいですね。あまり長くて説明的な名称にはできませんものね。

若林 おっしゃるとおり、学会の名称もミッションとビジョンの議論をすると同時にどう変えていくかということはあると思います。ですが、CIEC という言葉をいっぺん作ってしまっているの、CIEC を変えるのはなんか怒られそうな気がしますね（笑）。ですので CIEC を残したままとなると、あとはこの日本語名をどういじるかというのは議論の余地があるかもしれません。

CIEC の名称？

横川 コンピュータを利用するという言い方がほんとうにいいのか。コンピュータを利用するという言い方にとどまらないような感じがしますね。少し違和感があるのは、「コンピュータ利用学」という学問があるのか、っていう点です。

若林 そういう意味では、「学会」じゃないと落ち着きが悪いので現在は学会にしたんですが、設立当初のみなさんはあえて学会という名称ではなく「協議会」にしたんですね。やはりそれぞれ頑張っている関係者が集まるわけだから協議会なんです。ヒエラルキーがあるような組織のイメージではなくて、ムーブメントの組織としてもととはスタートしていたんですね。ただ協議会だと、これは学会なのかという問い合わせがしばしば出

て、交通費申請などする際にややこしくなるので学会にして欲しいという声が多く上がってきました。日本学術会議の指定も受けて学会としても認定されていたんですが、名称の上ではわかりにくいので変えてほしいという議論が起きたんですね。

横川 さきほどの話に少し戻ってしまいますが、CIEC の会員総会で否決された日本語名称というのはどういうものだったのでしょうか。

若林 法人化の前の話ですね。2013年に法人化しているんですが、2010年度の総会で今の名称に変わったんです。2009年の会員総会での理事会提案は「学びとコンピュータ学会」にしようというものでした。

横川 「学び」ということばがあったんですね。これを「教育」とすると、少しイメージといいますか、ニュアンスが変わりますね。

若林 「コンピュータ」という言葉は古いですが、とりあえず、ICT、デジタルテクノロジーを使うという意味では一番みなさんにわかりやすいと思っています。それで、教育というと狭くなるので、上から教えるイメージで学習者中心にならないので、学習、いやさらに広い意味になる「学び」という言葉を提案しました。こうして「学びとコンピュータ学会」という提案をしたのが2009年の総会でしたが、残念ながら通らなかった。それから一年後、2010年にはあらためて会員からの事前意見聴取（メンバーコメント）をすすめてリベンジだったんですが、英語名称は通ったんですが、日本語名称は「学会」になったという経緯です。さあまたリベンジするか（笑）。しつこいなと言われそうですが。



横川 個人的にはそれも期待しています（笑）。

新会長としてのメッセージ

横川 最後に、会員の方、それからまだ会員ではない方に向けてメッセージをいただきたいと思います。

若林 そうですね、会員のみなさんには、それぞれの自分の居場所、活躍する場所というのがあると思います。小学校の先生であれば今変わりゆく小学校の教育の中でどういうふうに取り組んでいくか。プログラミング教育や英語教育をどうするか、今頭を抱えて、頑張っておられる先生方がいっぱいいます。順次中学校や高校にも新しい学習指導要領がおりてきているので、現場は大変なことになっていると思います。もちろん、大学も。大学の場合は逆に政府からも自治体からも経済界からも、そして学生の親御さんたちからも強いプレッシャーがあつて、こんな大学で本当に大丈夫か、大学をなんとかしてくれといった要求があつて、それぞれの先生方が頑張っておられます。まずはそれぞれの居場所で、それぞれの役割を果たされるということで頑張っていくこと。そして、その成果とかその工夫などを、ぜひこの CIEC で—CIEC というのは非常に幅広い領域にまたがる学会で、専門的な狭い学会ではありませんけども—ぜひそういうものを発表して学び合う場の一つとして続けてもら

えるとうれしいなと思います。

もう一つは、わざわざ CIEC に参加するというのは、個別専門の学会とか勉強会の垣根を越えて集まるわけですから、やっぱりお互い自分の居場所、自分の壁といいますかそれを越えて、さまざまな人や、自分の専門分野以外の領域にも関心をもっていただいて、未来の教育、未来の学び、というものを一緒にどう創っていくかと、そういうことも考えるような場として、ぜひ CIEC、そして PC カンファレンスをイメージしていただいて、積極的に活動していただけたらいいなと思います。CIEC の会長としても、また理事会としても CIEC がそんな場になるよう頑張っていけたらなと思います。

横川 ありがとうございます。今日は、CIEC が新しい学会の顔として会長に選出された若林先生にお話を伺うことができ、会誌を通じてその声を会員の皆さんにお届けできることをとてもうれしく思っております。新しい執行部体制で、学会の「原点」に立ち返り、いい教育ができるよう、そしていい学びにつながるよう、学会に新しい風を吹かせてくれることを期待しております。今日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。